

朝夷巡嶋記

第六編

卷四

春

庫書	1005
5	50
6	169
188	號番
40	數冊

~ 13
3093
29



吉田屋

吉田屋

朝夷巡嶋記全傳第六編卷之四

東都 曲亭主人編輯

由井濱の奇貨

執權邸の交易

後輯第五十五



朝夷三郎義秀乃ハ兄常盛と共侶ニ宿所ヘカヘラんとシテ死浦大郎ハ
 川田ラレテ且渠ハ藁二郎ガ異父ノ兄ヨリシテ被テ有敷系ヨリテ置レテ
 又テ領死ク來路ノモテ常盛トシテ呼ビテ其レノ仇ニテ聊所
 家兄ト先トモ還ラセシメテ上見矢ノ趣トテ尊ノ大人ニ報多シトシテ
 常盛アルノ如ク然ルハ和殿ノ後者ハ舊ノ俵ニ送ラレテ大人ノ侯不樂
 人ハ所要果ス甲夜ノ間ヨリ還ラシメテ義秀一談ニ及ビテ宣
 するまでも。され其ハ後者ト皆送ラレテ其レノ之彼賜メ、鎧櫃ヲ背

昭和九年 七月三日 請求

肩より為るれ。只一箇の奴隷と。且くある。苗む。其の年。本民間。成長と。身と。浮萍のよ。も。定め。獨行の。し。け。後者の。事。益。その。餘の。れ。み。悉く。推辞。常盛。微笑。然り。とも。身。夜。蕉火。と。兼。る。れ。道。の。程。も。便。る。人。兩。三人。思。い。べ。し。と。よ。を。義。秀。守。史。む。否。所。西。女。とい。も。要。時。の。程。之。暮。果。ぬ。間。は。退。り。す。の。人。兩。二人。と。要。る。と。い。す。常。盛。強。も。苗。め。む。か。ら。ど。隨。意。の。ひ。ひ。還。り。宿。所。は。ゆ。べ。と。應。之。航。て。一。人。の。奴。隷。ま。あ。る。ゆ。さ。つ。の。よ。送。り。義。秀。は。別。れ。て。い。そ。く。く。鳥。の。海。面。黎。む。黃。昏。時。袂。涼。死。浦。風。は。吹。送。る。主。後。の。家。路。を。さ。と。還。り。ける。義。秀。要。時。目。送。り。遙。後。方。小。退。死。居。る。浦。太。郎。と。呼。近。つ。け。は。何。ホ。の。所。要。の。り。これ。を。竊。引。苗。め。る。彼。藁。二。郎。小。異。父。の。兄弟。の。り。と。皆。ざ。り。小。菴。里。の。と。ど。ど。この。地。に。住。る。故。を。め。め。日。を。や。

暮。る。ふ。ひ。と。あ。ぶ。と。い。く。い。と。い。そ。を。浦。太。郎。声。を。潜。め。緑。由。を。知。り。召。ひ。疑。ひ。ハ。理。り。僕。の。地。は。流。浪。人。の。招。塔。と。り。た。り。首。々。箇。様。々。々。尾。り。と。い。は。如。此。々。々。と。継。父。苗。四。郎。が。あ。ろ。を。汲。り。第。一。家。と。嗣。兄。為。り。曩。小。下。野。る。赤。貝。と。逐。電。る。其。の。趣。介。後。小。壺。よ。り。求。め。て。あ。く。ろ。く。浦。平。が。塔。養。嗣。と。り。り。又。浦。平。が。仇。る。も。捕。へ。んと。欲。せ。故。小。身。上。い。く。衰。へ。せん。忠。の。死。ま。ふ。女。房。校。枝。が。叔。母。を。れ。和。田。赤。の。奥。は。仕。も。守。戸。の。局。の。女。貝。よ。り。且。く。柱。と。も。を。れ。の。と。あ。く。の。薪。炊。の。代。り。足。る。べ。し。も。あ。く。去。り。去。り。歳。の。春。女。房。と。武。藏。の。太。田。へ。遣。り。廣。綱。朝。臣。の。莊。院。へ。給。事。ま。あ。る。せ。し。小。を。依。校。枝。と。口。れ。り。又。い。ぬ。日。小。太。田。へ。校。枝。と。訪。ひ。り。つ。る。と。い。ひ。り。る。矢。口。也。藁。二。郎。呼。け。ら。れ。る。渡。船。の。為。体。ま。く。送。り。告。ぐ。さ。い。や。僕。が。の。年。末。弟。の。宿。

所を知らせざりしと、渠も亦兄とて誠心の篤かりの遭は故郷へ伴て家と
 譲らんとてそのまゝの遭ぬをわすれしやありと尋思をし矢口申すも
 心ゆく忘をせざるは終に備別れ宿所を還り再は父苗四郎大人の
 枉死の事又朝妻との好意ゆく寛家の軀を刺さるも吉見冠者の恩
 義を感しく舊里へ立ちて鎌倉までも後ひゆらるる由縁あるは田殿の
 太田莊へ赴たぐ姫うへ仕まつる締の頼末云云といぬ日梭枝が物より
 具の傳りたるも熱心は隠れとも終に梭枝を嫁と知りて恨られせん
 然るにその誠心も還く不實のれはるるも田殿の鎌倉君は閉籠られて
 をりませ太田の莊に奴婢までも己が皆離散して今も同中隼人ぬと
 梭枝世稟二郎ホのまゝに彼姫うへ仕まつるのしゆもあつとせえり
 此のゆへに彼地はゆたかありの心と梭枝は世稟二郎は對面して時宜はよらば

これも亦且く彼如く足を駐めし妻と弟の次員もこれ姫うへのあはれを
 申すもこの浦にて世渡り便著のまゝなる骨と惜て何れせんゆとて軀を
 その羽の早ぬび太田へ赴たぐ一宿あり次の日彼莊院へあはれを
 あはれふれ宿所を焼亡れて人影もあはれぬ宵のまはれ今ゆら
 いを感しを解んとて近き里人許直より縁由を語り地方のれは定ま
 るるに鎌倉より討もとて稲毛殿の如隸は橋岡竹六とい和郎が
 殺兵をねく竊に來り同中隼人守直ぬを村長の宿所へ招れいと
 むつりし崇られし宵の莊院へ推せし矢庭の姫うへ主後を捕らへ
 ちこれ守直ぬが防戦ひ又彼梭枝世稟二郎が殺の敵を搦獲し隙の
 ぞく投退けを闕窺するのれもありのて莊院に火をつけ煙は紛も
 守直ぬの姫うへ俱に往方もあつと落させぬ口の痛し

昔二男と桜枝の刀自ら戦没して猛火は焼れ亡骸のまきごとと臥されが
 紛れぬるものなり。或は此件の男女これより先は自殺せしその亡魂の
 せめて野の敵と禦せしむる。いふれもわしはこれいづれが實説の虚言決定
 ぬんぬの誰うまふた。そのまればもわれ駿河前司の恩徳とあゆまされぬを
 その方々の人々の姫人の死は戦没する亡骸を狗鳥の餌とせしむる。わし
 況て彼は古くは鎌倉殿の仰よりてうち向ふ村まの稲毛殿の私を
 遣されより。主従多し火傷して面目多くやあひけん妻をもすそ夜
 走中ら。ちや鎌倉へ還りて。次の日里人商量て彼昔二男と桜枝の刀
 自の亡骸と棺と斂めり。里の曹源寺に葬りて。石塔のたむとも信掃
 るかの忠死を誰とせ言ぬれ。のれは件の墓を名つけ忠義墳とも
 りまはし。心の人いひたり。和主由縁の人る。墳塋まりともをせぬ。あへ下

枚の水一枝の花より外ま死人の為ま死のれ。南を阿弥陀仏唱
 け。詳細は報られて。ほるるけの歎た。外史ある袖の雨の空をせん
 宿も。かの里人。案内せられて。件の寺に詣り。あつと。ばり妻弟の名を
 の。送を墳塋。涙を。向の水中。て。あつと。を。繰返。悔の。八千。び。百千
 遍。口説。甲斐。ま。音。鳴。聲。蟬。の。の。蛇。の。の。衣。朽。る。ら
 柄。共。侶。の。死。ま。ほ。と。歎。た。を。杖。の。死。ま。あ。れ。び。ひ。く。り。里。人。は。謝
 び。と。述。別。を。告。ぐ。住。り。寺。を。退。出。す。進。ま。ぬ。杖。も。つ。ぐ。と。あ。の。悲。し。ま。る。ら。う。
 秋。も。似。り。う。死。雲。の。夢。路。と。地。の。心。地。々。や。う。な。く。小。壺。の。の。り。者。も。妻
 と。弟。が。同。日。の。死。せ。し。と。い。ふ。も。さ。の。ゆ。で。この。浦。人。の。昔。里。の。弟。が。あ。る。比。尋
 ち。り。の。計。の。死。と。の。告。て。承。ま。龍。の。ひ。ひ。は。細。引。の。人。数。足。る。を。嚮。向。の
 理。り。駈。出。さ。れ。て。刺。海。入。り。て。鰐。を。捕。る。鰐。を。引。當。れ。鰐。の。あ。

腹せれんと朽をく。覚期を究めりける。折よく大人の詰末ゆひて上の見
糸よ入りのへ。潜没の技をまめられ。死を脱れ。のまき。せ。護く。のり
け。兩隻の罾を。捕ふ。陸。引揚。義時主。免させ。ぬ。仇。刺して
年。末。の。宿望。を。遂。さ。め。あ。ひ。ぬ。る。洪。恩。の。謙。倉。山。より。高。く。小。壺。の。海
よ。の。と。深。く。高。木。二。郎。より。僕。より。御。庇。よ。と。父。と。外。舅。の。究。弟。の。軀。を
刺。さ。る。も。大。く。ま。ら。ぬ。過。世。あ。る。契。と。を。思。ひ。な。れ。ぬ。今。より。僕。を。墓
二。郎。と。思。ひ。召。す。り。つ。く。ま。で。も。使。せ。ぬ。の。身。ひ。と。を。弟。と。二。人。兼。る。腹。心。之
命。を。け。て。仕。んと。願。ふ。ろ。を。う。ち。つ。け。小。且。田。殿。の。奥。が。の。卒。く。落。さ。せ
あ。ひ。より。も。妻。と。弟。が。忠。死。の。も。と。報。知。し。な。ん。と。不。覚。心。を。か。て
長。物。く。り。小。日。を。く。り。御。足。を。駐。め。な。れ。と。を。礼。を。も。つ。あ。ひ。心。と。辭。せ。と
あ。く。其。死。る。人。の。誠。を。義。秀。の。且。感。下。且。憐。れ。と。嗟。嘆。し。勝。原

来。高。木。二。郎。の。義。は。仗。之。嫂。と。共。侶。の。命。を。捨。て。欲。健。氣。を。吹。か。如。死。の。汝。達
夫婦。も。孝。友。忠。義。今。の。世。小。日。く。ぬ。と。死。一。糸。の。美。譚。彼。弟。ゆ。て。二。の。兄
あ。り。あ。の。良。人。ゆ。と。彼。妻。あ。り。便。を。と。求。め。り。田。吉。見。兩。友。を。報。知。せん。只。心
の。こ。ろ。た。の。且。見。姫。の。ひ。り。さ。ら。れ。間。中。守。直。あ。ら。む。も。一。く。潜。ひ。て。居。ら。ん
これ。亦。竊。小。往。方。と。索。り。て。先。仲。丈。婦。再。會。の。方。便。も。其。処。は。あ。ら。ん。と。海。と。死
示。さ。せ。死。の。も。回。へ。ぬ。も。ヨ。り。れ。ど。夜。の。濱。邊。に。立。在。て。い。つ。ま。で。密。談。を。死。宿。野
あ。り。と。意。中。と。重。さ。え。は。ゆ。り。れ。は。跟。く。來。よ。と。の。ひ。の。後。方。を。ん。と。七。假。屋。の。こ。よ。送
され。る。後。者。を。招。け。り。鎧。櫃。を。背。肩。し。て。あ。り。去。る。程。浦。太。郎。推。さ。め。り
今。要。時。等。の。僕。が。告。及。よ。ま。り。あ。り。く。續。松。を。り。て。あ。ら。ん。と。の。ひ。の。義。秀。の
遽。く。呼。ぶ。め。あ。ら。ぬ。く。鳥。夜。を。り。と。道。路。平。坦。さ。る。あ。ら。ん。と。の。星。光。を。事。足。り
誘。さ。す。と。い。さ。す。て。先。よ。真。沙。路。は。夜。の。夏。る。心。地。と。風。吹。れ。ぬ。程。浦。太

郎其死くけらん由井の濱邊也。彼経任時夏ホが首級許す梟られたる
 罪惡と示さるへん衆人んま欲せしども將軍の小壺の濱邊御假屋へ
 出させぬや憚の関るはあわねよく見ることをばせしとて就くいと小思議する
 経任時夏ホが討れ四月十二日の日数とよめられ既四十餘日の日数を歴する
 首級どもあむ。且今炎暑の比るふ腐も爛もせむとるん奇妙のりよゆのむや下
 ざるの風聞は件の首級のぬ月鎌倉へ来る比みる梟らる死にけりしと執權の
 大殿時政の彼時夏と貞願肩あへんとするふ拒みぬひら斯きまよ日を過され
 一と秩父殿の理を推しく。まむく催促あひけれ今のをや大々するを腐も
 爛もあつらんとて今朝よりそめめ梟られよ。その首級のみる生る如くまむ
 とてあつらより執權の案に相違して呆れてとらまままごのりの例の人の
 悪言あや梟らる死時を大く短し今を求あへ世の人のよるぬ評判するふとて

潜め死告れば義秀がうち合咲は領を然るがより便路を遠くぬ
 らぬ向寄之誘濱傳ひよあてんとく。あつと只管を歩の運びとてふとく
 由井の濱邊へ赴く程は宵のまや初更に迫りけり當下義秀必や彼首
 級どもの腐爛せざるべし陸奥のあつ時高利ホと相謀り浮槎道人を
 授け茶水せりて浸せ。故の時政れを知られ既許すの日を過ら今に至て
 梟らるる只時夏が死後の恥を掩んとするのまらとて。たれ渠を鷹揚する
 その牙の恥をわらふよりて府内を待不疑ひあり。あひわれもその首級の腐爛を
 ぬ天の眞罰且茶水の経験の空からぬを知ふ足れると天のまましく民をせしめ
 天言どて民のいひむ。されば七われ時政が機密を撈り世の評判を肺肝を
 視るが如しと怖る死のるまやと獨みつら肚裏を過あり。あつとひひゆる海
 只管をわく程は忽地後者ぞとて今逆徒の首級とるとも燈燭多くて

不便に汝の鎧櫃と浦太郎も肩替りして近江町家へ赴きて、蕉火を買
 たり。由井の濱邊で追著りし。これにて大刀の緒を燃し、小飲する。錢を
 そと取りて遁とせり。浦太郎も進み寄る。否蕉火の僕が只走一走り求
 めて来らん。とてひらけて別れ去ると、とて義秀と急よ。禁めてもくとて
 難くもあふ。あれど、蕉火を徴めり。別々あることわく。相識もる。宿所へ
 ひとり汝が更闌く尋ねると、便る。一柱、しが意に任せ、かゝり。されど有理
 とある。をいり、躬て件の鎧櫃と、ち命さす。背負揚れば、供の奴隷もあつて
 ぬ。然るに後より追著る。徐々ある。をいり、とてひらけ、踵を旋りて市肆とて
 走り去りけり。是より、義秀の初のごとく、路をいり、とて、いもども前程の遠く、ね
 由井の濱邊と、ち命さす。現浦太郎が、いり、違ひを殺梟られる。逆徒は首
 級の経任時夏を首とて、神井鬼六、珍浦、五十五、六、路、狗、吼、又、象、子、彈、平、太

鶴、夜、又、鴉、夜、又、ホ、賊、得、ま、て、七、級、あり、惜、い、き、く、死、夜、の、日、生、光、の、便、あ、く、
 定、ふ、る、不、足、く、む、件、の、奴、隷、が、蕉、火、と、ど、り、七、ある、と、待、び、い、ら、ふ、あ、く、
 後、方、と、る、る、の、且、く、と、ま、り、立、在、程、は、怪、し、む、一、箇、の、癖、者、梟、首、架、す、潜、び、
 近、つ、建、る、柱、よ、り、と、り、け、攀、登、り、第、二、の、首、級、を、撿、取、擢、り、と、ま、り、と、
 美、我、秀、乃、も、透、り、て、脇、挿、の、刀、は、附、る、合、掃、枝、を、抜、り、矢、声、を、う、け、丁、と、
 設、け、の、寢、違、ひ、癖、者、の、右、の、脇、に、打、込、め、て、忽、地、撞、と、墜、れ、た、の、灸、所、を、後、
 物、と、も、せ、を、搔、投、捨、り、身、を、起、ま、を、義、秀、透、さ、む、衝、と、よ、り、捕、壁、へ、ん、の、
 程、は、癖、者、も、亦、眼、を、多、く、刀、を、見、り、と、引、抜、く、敷、き、の、ち、と、身、を、及、ら、し、刀、を、
 礮、と、う、ち、落、し、勇、士、の、働、は、目、覚、り、利、腕、を、背、へ、振、揚、て、踏、著、々、々、動、を、大、
 刀、の、緒、解、き、高、く、小、を、滅、入、ま、す、縛、め、る、浦、太、郎、は、牽、ま、さ、る、と、り、
 立、て、透、り、の、汝、の、原、是、何、の、れ、る、ま、賊、徒、の、首、級、と、り、と、竊、去、ん、と、ま、り、と、

おのづから経任が残黨ありあつて、人々頼れるるん。明々地は首伏せよ。時
 冥よよろしく命と助んごのりむる。と責問の癖者怯る氣色もあつて、あつた
 穿鑿金三昧勿論和ま猜せざら。これ豈賊の残黨あるんや。主君の密意を
 稟てあつるふ名告ふ晴と眩しもせん然るを漫は索さくはて後悔せよと罵
 せよ。義秀呵々とうち笑ひく。そらおのりろ。主の名も汝が名氏も云云と有はる
 僕よろちあせいのも息の根留んむと罵りまう。蹴倒して隻足の壓を蹂躪れが
 癖者苦痛は堪むとく。や。等々名告るべ。これの執權家の内は主役
 二代の近習の侍湯嶋佛太郎基連といふの。今宵時夏の首級を隠
 せとある大敵の密意はよろしく。癖のある及ぶの。好もぢも執權は後ふは
 必采へ恃へ亡びざるの。和主も其処はあつた。この縛とく解ねまふ
 これも主君は告を後日お出宗あるところ。や。喃々と威ら賺ら口説く哉

義秀は再び再声とゆりまう。推察し違ふとく執權の家諒を
 せよといふく免。世の人の時政親子を虎狼の如く怖れもせん。彼奴
 求るとく利もまうむ勢ひは附んと欲するはる。時政を怖る死せよ
 汝を彼家之機密預るはる。よりてぬ。ひ問とあり。義秀は田藏
 人と冤屈の罪小陥れる謀の誰が所行ぞ。時政の伎倆もま。必義時
 奸計あるん。些も隠を實を告よ。い。背骨を踏折るべ。い。や。いつと主
 同母小足小旅月力と踏入れ。佛太郎は兩三度知むと。又。程は漸々
 千曳の石を厭ま打。似く。息絶々。霜枯野邊は鳴虫よ
 ても。細や。声立て。や。垂安時寛へ。や。主の為。命は換る。い
 る。彼。田藏と陥れる謀は。大敵を。みる。郎君の計略。某密議を
 奉。是。義。病。病。假。托。湯。治。の。暇。を。請。ま。う。ん。竊。は。奥。へ。走。ま。う。ん。

軍の勝負士卒の進退光仲ぬの執行する支の趣送もるくく
 見漁しく彼凱陣先走り走りと云云と具に郎君を報らば更
 又稲毛殿親子と閑談しひく尼御堂を敷敷し又光仲の長唐櫃とよく
 相似る長唐櫃と四棹造りく驟雨の途中にのく云云と計りて罪を
 肩するその折供物の假宰領の面目をけれと某の好も主命をれば已
 ことをさすのそと大殿も郎君も光仲ぬのを憎とあるこれ一朝のゆゑ
 鎌倉をも下野をも彼人かたの故主のそと小背たる出宗をいふせ
 りたるいひ果つ抑和夫何人ぞも主君も憚るも猛者も量のある
 りける小鎌倉武士のいふゆゑと起りてあひひと啣言のくち勸解
 ると義秀時をいひわんは汝類も名を問は主は告んとしすよを今名を
 びとも後あは知るん既首伏するをこれ決して汝を殺さば然と今も

かす乗物とりて送らん要時暑さを忍ぶくとあひの随いひ徴しつ
 浦太郎とるりく鎧櫃も所要のりそのかん體を引出し櫃のこも
 あへりてとくといそと踏まをりける沸太郎が項髪をひくと搦攫く
 宙を吊りて件の櫃へ推縮め振込く蓋りて壓へく舊の如く鎖かけ
 打敵たあ沸太郎命惜くかか出まをる声をも立を扱も仇骨折ら
 先休んと鎧櫃も尻うちらる大勇大度も浦太郎の直と示れて彼後
 者がかへり来るを今と待らける浩処は供の奴隷に稍蕉火を買こり
 振照らつる本よければ義秀ヤヤと呼び近づけて且浦太郎も云云と左
 示しあろはさして嚮沸太郎が滾し落せし時夏が首級を取揚よこ
 ちの如く梟さしつる掃枝を拾ひ取りて鮮血を拭き遠く鞆の如く
 奴隷のいふやうにこの猛り要支のそと時政ぬへ赴くは汝のそのかん體との

菊燈臺の白昼の如く明りける廊下の寛く紋紗の燈籠を掛られたり。既ちて席は着くとた執達の家謀が先も進んで頼をつれ。是れ朝夷三郎ゆてゆと調を執りて此下退死誘彼方へと請進。義秀臆る乳色も時政より對ひて只揖と再拜をされ時政面を勃然と眼を仄信とる。此邊の和田の陰子あり。彼朝夷三郎欲今鎌倉の華浴は勝る衣冠賢才都會の府より礼儀疎に田舎児の萬事よろろよゆぬのゆゑ。夜艾の來訪何むと問れて義秀天うち抑て歎息し。且く谷も忽地声を房して某嘗ははるの唐山の周公旦の周成王の叔父。當時補佐の大臣あり。是れも生平は輔と吐て客を迎へ髪を束せし。猶天下の良能賢才の致しを憾とせり。越し和漢の今昔を思ふ。亦將軍家の外祖あり。迺補佐の大任あり。周公旦あり及び。

とも。士とて衣の如くみづから莫大ゆて客を驕り君の爲の事。も天下の賢人若士と徴るのあらるや。の如くふる海内の賢才良智の袖を拂て他郷を去り亦只阿黨の小人の鎌倉中へ元満をべ。其の義を思ふ。老を媚を諛りも今寝門より驚くと聊めん爲と述ふ欲も。左右の人と遠さけゆ。時政苦咲く。此の漢書に。杜攸の彼國の故事と。老を人を遣込賢自と。これ。の風俗異りて又今昔の差あり。れ周公の取入る。亦伯夷叔齊の大賢人の似る。唐山の例を。其の。密議の。左右の人の。其の。一白もけ。許客本意は稱り。然る人々を煩え。某が後者は齋。禮儀の。

たぐりよりゆひのこらよ一箇の家謀が遠く外貢する事且く雑色
 二名よ件の櫃を扛し廊下よりとあるを義秀側より居指して又時改まら
 對ひ某君父の愛顧よとくゆび鎌倉の水を飲ま又鎌倉の飯を喰て
 將軍家よ見参する幸ひとゆれども年来浪人よりけり今執權進
 ざる苞首の絶てり只今宵由井の濱邊を圖るも入りける古今
 未曾有の禮の先この禮の奇特とら一トこれを穿ふの心奸佞隱
 匿も亦く逆徒時夏が首級を竊て隠さんと欲する奇特ありぬび
 これを領かたの腹心の家謀とく假唐櫃と造りて賊徒退治の大功
 の先仲と寛屈の罪に陥る機関あり況く吉見冠者主後佐味空内
 高利をいふ幸死めをえざる機関の皆この禮の儀の隨意揮故
 事されば又こひこれを撰めたる稲毛が腹心の家謀と太田の莊へ遣り執

權の密意と信へ且見姫の逼迫く辱めんとする機関ありさればこの禮を名づ
 けく遠相二洲の父子繩目湯嶋威と名づけり奇妙の物ありと數
 立る隱匿の胸に對する主後の食顔の色蒼蒼する赧くまり目と指し
 裡面をなした禮の櫃は鮮ぬ惑ひの父子繩目心の底に沸く湯嶋が偽為
 損トく生拘られ狄首伏せ狄をれあくぬ狄まよりまこと同よりするこそ
 秋の螢の草隠れ滅も入り死心地く齊一太息と吻をけり嗚呼時臣位
 の忠を忠良よく虐られて暗君計の殺るをあらむ當時鎌倉の形勢を
 ちよ呂后政と聽王莽扱するふ似たり只朝夷の膽を穿りて千軍萬馬を
 撃塵けて人る死郷に入る如く此のまふ時政が奸邪の意中にて
 とく櫃よむとゆれ某既まこの禮の奇特と具し述されどもさうりふん
 疑る不疑るともあべ且看一看て言の偽るるを知らぬゆひの

自ら多し鎮推用之益擡除れ沸太郎縛られ居るは頭を擡て出
 んと云ふ時政主後よ目と目と指しつけられ居るは頭を擡て出
 駈ぐ主後と尻目おつる義秀の透さまで益と沸太郎が頭は推被せ推
 籠く續き固めくゆびを執権いふえあひ見参の牽出物
 進まざるもひもまのふまの擔石の儲もろり浮浪の某今ととも
 親は被るものこの奇化負と故る人あ贈りて。あまんと商人やうね
 りや千金萬婚へとも賣て利と射あらるも。只某が望のいと交易
 り進せん。あまとも望まざるのいとくると親は告翌回註所へ披露と
 鑑の奇特と頭と上の油汰は任まべ。夫執権の棟梁諸侯士大
 夫萬民の善惡邪正と監と政ののて職分る。只この鑑の故とて
 多年の勤功画餅とるが惡名も亦隨く。後々まを傳へられ某この

譏とまよより郷間と夫老の為といひ。即老婆親切を交易され各々利
 のり込損のるる物あるとく。尋思あるひひと辨せ。同結れて時政の
 心くる。もと又眼と困く肚裏もあやう。且曩も重忠能負ホが逆後の首
 級と梟よと。類のあ諱ひ諫しとも経任ホいとまれ。これ時夏は當初
 執立る副将あり。その首級さよ棄られ。いよく。恥るべ。と
 論せ。己が義秀も亦参著の喧えわらちも措れ。彼首級共と今
 朝も。由井の濱へ梟とせ。素より。のり。のり。高亭午の比より將
 軍の。小壺の濱へ。を。あ。衆人。へ。憚。首級。を。執。念。際
 べ。衆人。の。彼。時。夏。が。首。級。を。取。隠。と。思。ひ。は。生
 湯嶋沸太郎と彼れ遣しつけ。折の。と。義秀。奴。撞。見。の。生

拘りて日る計り。夏は送まらぬものも。鄙語といふ百日の説法を
 放屁ひとつを放つて。異なれば。況んや先仲を陥れる謀。我時親も
 知るを計課せし。緯士二分より。沸太郎が如此々々。これなれば
 其なる尤秘密の妙策なれば。純は稀毛と沸太郎が外。ある死のりるは。
 このを。義秀叔。誣せし。之を斬られ亦。これらの怪勳の。早
 餘今日置府。彼首級共。此も。舊の儘。亦是不思
 謀。今義秀が望。任と先沸太郎を受取。
 余後。又見。これら。妻。あ。子。商。量。せ。が。
 智計の。望。候。の。只。穩。便。な。れ。あ。ら。
 尋思。眼。を。ひ。ひ。義秀。対。目。今。わ。れ。趣。を。聊。愚
 案。を。旋。甲。甲。武。士。の。緊。要。の。や。奇。特。の。を。異。な。れ。ら。不

贈るとる。交易と望。任せん。の。欲。め。と。同。へ。義秀。微
 笑。異なる。の。あ。ゆ。ぼ。田。藏。人。吉。見。冠。者。佐。味。坐。内。本。を。禁。錮。
 の。罪。の。あ。ら。う。この。鎖。を。り。て。分。明。の。れ。バ。件。の。入。り。恩。の
 義。を。行。も。各。功。の。ヨ。少。は。随。ひ。賞。禄。を。賜。ふ。と。盟。書。と。書。の。あ。
 一。通。と。この。渣。を。交。易。し。て。あ。ら。う。と。い。ふ。時。政。眼。を。睜。と。
 易。く。取。換。物。り。ま。ご。評。定。衆。と。會。談。も。遂。に。上。の。賢。慮。も。料。
 の。彼。輩。を。免。さん。と。い。ふ。盟。書。を。書。か。ん。や。と。推。辞。を。義。秀。は。あ。
 然。で。の。交。易。破。談。り。今。の。世。の。賞。罰。の。執。權。父。子。の。あ。ら。う。出。る。を。
 誰。と。く。あ。ら。ぬ。の。も。の。の。れ。が。上。の。罰。の。あ。ら。う。則。執。權。の。罰。を。上。の
 賞。の。あ。ら。う。の。執。權。の。賞。ま。る。之。賞。罰。の。名。の。君。あ。り。て。その。實。の。君。あ。
 の。ま。の。を。尸。位。素。殮。と。い。ふ。其。の。意。を。知。ら。ぬ。彼。誓。言。文。を。求。る。



義秀 義勇
時政の奸邪
と挫く

朝夷六編卷四

時政

朝夷

兼太郎

今巷路る邸より、緯云云と報し、義盛時とありんぬ、後
 者、穀遣まべし。とく出せしむ。これ若黨奴隸二十名、馬を牽て
 時政の門前まで集合せし。今時政の家、隸ホが朝夷大人のあん立ぶ。
 と呼る声、若黨四名、門内へ進入り。左右は別れ、つゝぬ。
 程、閑く門の闔、執鑣奴、牽り居る馬、義秀ありとゆ。
 足、閃く。前後、浦太郎、後、跟、
 くら、夜照、張燈の三引の紋、五六張、八、七、七、鐘々と、曉告
 鐘の音と共に、まづ、ふねり、時政の家、隸ホ、この好景、亦
 呆む。彼人、を、と、賤夫め、後者のを、還、及び、
 人馬の數の、大、殖、の、出、没、不、測、の、勇、士、を、為、る、時、
 右の如く、彼戰場の進退機、變、と、と、想像、る、と、舌、を

掉く、怖、主の時政、告、時政、類、嗟、嘆、悔、り、
 くだり、ひ、呼、膽、勇、剛、正、の、武、士、權、を、犯、奸、と、折、せ、世、の、人、
 愉快、る、一、む、実、古、今、の、難、事、な、る、べ、し。
 浮雲、襖、の、猛、雷、
 團坐、席、の、夢、話

後輯第五十六

團坐席の夢話

この夜、和田、義盛、その子、義秀、が、還、を、俟、く、嫡、男、常、盛、ホ、と、相、譚、ひ、
 挾、夜、深、る、ま、て、も、絲、ご、り、又、三、の、比、及、び、く、義、秀、を、な、く、
 同、り、は、赴、死、て、郷、高、小、頼、家、卿、は、見、參、の、支、の、趣、并、小、壺、の、浦、人、浦、人、郎、が
 事、を、報、く、某、お、り、ゆ、れ、い、か、さ、は、執、權、の、宿、所、に、立、り、
 面、の、田、吉、見、の、寛、柱、を、明、々、地、に、以、解、ゆ、ひ、は、遠、州、を、
 し、證、拠、を、取、く、推、を、け、れ、疑、心、氷、の、お、と、く、は、解、て、執、達、の、錢、を、有、れ、り。

権評定衆の連署到来して貴所并吉見佐味の人々之恩免の御沙汰
 汰あり。これより明日己牌己前義秀と相共おぼく營中入奉れとある。おん
 下知と承りぬ是併義秀當所は參着者の夜中より一諦せしありといへば
 緯のよま及ぶ秋晝晝不測のよより人言ふは義盛が預言なりては
 疑氷をうらぐは解盡七止水一巨海は帰するの勢ひこれよまのありは
 浴のる。礼服の儲の専女守戸ホよ分付あぐこの意をゆれいへといへ可
 嚙よ告ふければ光仲の遠く席を避く額とつた仰の趣兼りぬ寔は此
 よりして庇よ卒龍居の旦暮と安く送るの苦中の樂不幸中の幸ひと
 をと思ひしは賢息參府の程もろく五曹の萬死を極めて又天日を奪ふあふ
 洪恩高義の今ゆら感涙の外いれ再會の果胸臆を盡さべくいと亦
 他事もろく言義けり義盛の聖の儲は暇をければと退るは荏柄佐味の

宿所々々へ使者と遣く致びと告且登營の時刻を示し合さるるは
 彼人々よりも使往來くこの日なほむく暮ふけりされ日ろ光仲は諫らむ
 たる守戸の局と男童ホハハ件のの趣を傳へとさくは誰を致さ
 ところ命せられも奔走してその夜を長と待ひびり明れ六月廿六日の
 辰の時をり。和田左衛門尉義盛義秀と光仲をぬく營中ハ參る
 程は荏柄平太胤長と吉見冠者義邦と伴ひ佐味生内高利ハ下河
 邊小二郎高吉と俱に食營中へ参るけり且くく件の人々と齊一正廳
 召聚合し執權遠江守時政の頼家郷の御名代と七上座あり
 左右の官令大江廣元河注所の別當三善入道善信あり先義秀を
 召出く廣元仰ては和田左衛門尉の蔭子朝夷三郎是義秀の經任
 誅伐のとれ彼地おぼく軍功の咄えありとて新規に御家臣お召

置れをんぬ但一相応の願所をりければいまだ荘園の宛行れを極る黄金を
 のりく年別は如干兩を賜へ宿衛の為遠侍は同候と忠勤を抽き
 父左衛門尉もこの誠意をゆるく教訓を加ふ所の也といふ傳命既小言訖
 軍監とて彼地を遣さる所萬緒の進退も困らるるでかん疑ひありとて
 出仕を止めらるるといふも恩免の君辺を退けて外様を召置るの事并は
 光仲が使者下向邊小三郎も今いさる御用事今日則身の暇を取らば
 進退の主の隨意をべしとて宣知ける次は義邦を召出せ廣元仰を
 傳へ云吉見冠者の事曩は陸奥に在る信丈莊司が擧とらるる事
 新その刃丈婦の賊徒のあは擧せられ御方の英氣を折くといふも最
 後義秀の次男は名も時夏と討捕るる郷に聞召とらるる事ありとも

光仲同意の事不依くる間か疑ひなき不中なる故は莊柄平太は預
 置れらる是より御衆議よりせられ寛仁大度のおん上日と
 此度光仲と恩免の御沙汰とらるる事されば御事と邪正を問ふ及ぶ且
 冠者の蒲殿の孤白鳩丸とらるる事その時をありとらるる格別の議とらるる
 武藏國足立郡石戸の莊を宛行る件の莊園の故草布府の宛時足立
 藤九郎盛長は御加恩の地ありとてその子景盛家督の後上の宛氣
 とて世襲せしめ居せられ召放され所へ彼盛長は蒲殿の外
 舅ありて冠者あり外祖ありとて此度食邑は賜あり
 るりたる石戸外野村御中と治めく洪恩とてとらるる倘録倉君も大
 事ありとて馳参るべし條勿論とらるるといふ傳命既小言訖
 光仲を召出せ善信仰を傳へくといふ事田藏人光仲喜表は駿河前司

廣綱の願ひより経任謀伐の大任を假しその所勝負區々あり時
 日を送り漸く義秀方の次員よりて賊徒誅伏せむといふも義秀を伴ひ
 せしと自分の功を倡へ勝不良の言をあるとて和田左衛尉は預置れり。
 是より執權遠州父子竊ふその才を憐みその罪をわらばり頻りに
 ましり寛らるるありとて又ゆる縛の邪正を問れど所云罪の疑れを問れど
 功の著せを賞せらるる但し光仲の駿河前司の女塔るよりその言をありと
 ども彼人の家督の事を願ふまじと陣中より逐電し今に至る
 往方あるを光仲家督なる由をいれ今ありしか家臣をまねて
 莊園も宛初れりよりとゆ金三百兩とて件の軍功を賞せらるるその身
 暇を賜ふれ但し武藏國大由の莊に廣綱の私田あるを息女且見
 媛の所得とて光仲後見せんともども穩便の議とて是非の由

はたされざる得廣綱の往方と素より彼人家督を願ひまじとてその折
 召くさるる上ありのより御沈辭めて今日も出御る一廻遠州と御名
 代とて誼意の趣件の如く各々兼知せられ彼勢々違乱あるべし
 むといふ嚴は宣く衆皆齊一言兼て恩を謝して退出る。かくて
 義秀又管門の所より入る人々立別れ時政の宿所へとを赴きける。是
 管中より退たてらるる。時政は候て久しき時政は對面し執權
 前諾と違へどけのせん計ひを辱けし就て誓言文一通を返し進ん
 某が鐘の楯をどしとひひと催促する。かの一通を遞与ふれば時政は苦
 多く何れもゆるみ能く家難しく楯を義秀に返す。義秀は益を
 擡取りんく執權これの唐山の鄙語よりるが如く珠を返す楯を四つふ
 然りとて送は損益る。但光仲の一議のいふも感心しつる。天道の

盈る憎む内家臣も下されば社園も宛行れど畢竟放棄人
 如くも還てそれ彼人の幸ひあるは然其の優も
 り。暇まるとと遽く外面へ立出づ。權を後者北月原の頼馬次
 走りて。馳て宿所よりけり。是より先義邦高利光仲ホ義盛
 胤長の後限死く執權官令評定衆の宿所々々を巡り。江三二
 廣光馬頼標吉郎嗣忠城戸四郎武詮水草太郎五昌之ホ其
 主の供立或は途小出迎へ。會堂中の沙汰を尋く。聊愁眉をひたけり。
 何と件の人々の義秀が還て候く共飲びと述んと。和田の邸に聚合
 して。義盛の常盛と吉席をひらき。酒食と羞物を管待せ。程義秀
 出り。奉りければ光仲義邦高利ホ主従齊一。出迎へ。馳て上座を請。馬で
 會飲びを述。恩と感。下見全く賢兄の義勇の論。深まるといふ。

御小執權と論。あり。あり。有ける。大人のおん物。あり。あり。大際を
 のれ。る。肩。詳。は。甚。庶。る。方。便。の。ゆ。ひ。と。同。へ。義。秀。微。笑。て。不。言。せ
 る。の。あ。も。あ。ぬ。と。今。誇。白。し。生。る。も。西。女。ま。早。暮。は。某。陸。奥。あ。く。諸。君。子。よ。う。れ
 より。如。此。々。々。の。ゆ。ひ。あ。と。と。誣。訪。嶺。の。狒。々。の。山。金。九。郎。山。路。ホ。が。初
 と。と。岩。神。の。事。の。趣。友。鶴。が。天。折。判。五。が。妻。も。世。を。逝。り。鉄。指。矢。藤。五。が。の
 田。鶴。媛。が。厄。難。執。繪。の。尼。ま。い。れ。り。ゆ。ま。で。輝。送。も。り。説。示。ま。し。人。々。駭。嘆。せ。さ
 り。も。る。く。且。友。鶴。の。死。と。悼。と。執。繪。の。尼。の。教。訓。と。只。願。感。伏。ま。り。け。り。め。く。く
 不。血。の。數。も。遠。程。は。光。仲。義。邦。共。侶。は。廣。綱。の。遁。世。紀。念。の。扇。歌。の。小。袋
 坂。の。厄。難。より。士。卒。も。忽。地。離。散。し。身。の。囚。徒。と。り。あ。る。古。文。の。趣。物。を。い。は
 又。高。利。高。言。の。賊。徒。の。首。級。を。齎。し。先。ち。て。ま。る。甲。斐。も。り。因。記。ら。れ。る
 更。の。形。勢。箇。様。々。と。光。仲。ホ。過。ま。り。と。耳。に。た。つ。常。盛。の。小。壺。の。濱。め。く。



今巷路の
 知己主徒と
 再會せ

草葉六編卷四

浦六郎

城戸四郎

不可

光仲

朝八

よ

馬

水

依

廣

このと死板枝を嫂と知るも甲斐多た今般の内兄弟只俺們が首級とて
 おん刃は衝心死せしと殿へのいと死めんことを又志くも姫うへまうし送りしけれ
 ども姫うへは只薄命をうちも歎せぬひつらん頭髪を剪ぬひ死せし件の祇
 物よおん黒髪と一首の歌と包添さぬ折らう福毛が家隼橋間宮六殿
 兵をおく推寄せまらうと狼籍及びいへ間中隼人大く怒りく且防
 戦すのうら大敵るれば既危く遂は件の袂包と名六は奪田各れく姫
 うへは敵の為は擒とるせぬあより厄難と守護なる俺們既身死
 まれどもおん詰る魂魄はる月あん月を去るもとて間中隼人よ力を劔
 とて殿の敵と戦ふ惱し袂包とる復して内莊院は火を放ち火攻めをなれが
 敵のいづく周章あら幸して逃亡しつる程は姫うへの間中隼人を死供せ
 恙もろく落さぬひつ既して伊豆國なる益玉よとていませどもおん御刺

髪をせぬ及せぬと俺們匹夫の思慮短く大切る姫うへのおん贈り物を
 仇と違ふしと殿を陥めたり刺姫うへは濡衣を着せまらうと飽ぬ妹
 伎のおん中を列衣れしものこそまうし解くべしとて教るるぬ刃を
 殺せども誰り亦姫うへはおん衝心死せしを殿中へ傳へしと死口このこと
 どの故よ身への執火坑は墮く六道の迷ひ亦存る時あり朝夷ぬし六録
 倉へ其有せぬとておん籠り居も恩免あしせぬとて解厄の期も遠く願ふ
 伊豆の益玉より姫うへと迎せしとて更借老同穴の契りと結せぬか
 言露なるりも偽りまらぬ証拠の為は姫うへの袂包とてまらぬとてうち披
 れんをまらうと疑念を解せぬとてと益玉二郎が口説が板枝も其よ
 語を續く潜然とうち泣死しと其敬馬は且憐とて其詳は問んとせし
 二人の忽地身と起しる面影さよ初は似ど髪より乱もて凄しく鮮血小

吉田屋

塗れし身とられる所の鬼燐と変りて飛去ると某る所も呼とめんとて
 やよよと叫ぶ声と共に愕然とて敬馬覺れば是南柯の夢なり夢
 然と思へば袂包へ正しく枕邊あり現ると思へば又その人など武藏使を
 遣とて姫の安否を訪ざりせむとい定る所のゆゑとこれらのゆゑ守戸は
 説示さへ有敷余もくけふまぐ曾も秘れども心の息愛ひを諸君子は怪
 められく黙止るる奇談も及ぶる守戸の局が媒妁しく且見の
 筒牘を届けると某がよみ贈り魚酢の歌々如此々々余後夢想は
 ぬりける且見姫の黒髪と返りの歌のあり見ぬへと懐より
 袂包をとり出さるる披紙をさし示せばこの席上は存りと有る朋友主
 従かゝるうち敬馬の感嘆の声を合して只管は膝の進むをあらふりけり

終

儀々々々却めしほふ子に
 名は後を承ふ成以

儀々々々後女子
 名は後を承ふ成以

